

□ 本でも、ヴァイキングがルーン文字という、ラテン・アルファベットと違う文字体系を使っていたことを知る人は少なくない。二世紀頃にゲルマン世界（今のドイツ語圏）に現れたルーン文字は、もともと二十四文字であったが、八世紀頃に十六文字にまで減った。おそらくは利便性を考えたことである。学者たちは、このルーン・アルファベットを、その最初の六文字をとつてフサルク（futhorc）と呼んでいる。

しかしながら、このルーン文字が、ヴァイキング時代以降もスカンディナヴィア世界で用いられていたことは、あまり知られていない。確かに、ヴァイキング時代をつうじて西ヨーロッパの教会がスカンディナヴィアにもその勢力を広げ、それに従つて教会の言葉であるラテン語もまた普及した。国王や教会といったエリートたちが作成する文書はラテン・アルファベットで書かれ、十二世紀から十三世紀にかけて、スカンディナヴィア三國もまた、他のヨーロッパ諸国と同じようなラテン・アルファベットの国になつたと考えられるがちである。しかしながら、中世になつても碑銘や写本でルーン文字が用いられるることは時折あつた。今回の特集で取り上げられたいくつかの教会の壁にも、ルーン文字は描かれている。

一九五六年、学者たちの認識を大きく変える発見があつた。場所はベルゲンのブリッゲン地区である。ブリッゲン地区には、十八世紀に再建されたドイツ・ハンザ商人の家屋が残つており、世界遺産に登録されている。しかしその起源はドイツ人商人が移住してきた十三世紀までさかのぼる。前年の火事のため、近世の建物が隠していた中世の地面がむき出しどなり、そこから大量の木片が発見された。木片の表面にはなにやらルーン文字らしきものが刻まれていた。情報は直ちにオスロのルーン学者アスラク・リーストルに伝えられ、調査が開始された。

結果は驚くべきものであつた。ルーン文字の刻まれた木片が、およそ六百片である。カマボコ板のような形状をしたマツ製の木簡は、十二世紀から十五世紀にかけてのベルゲン人たちの生活の一面を生き生きと伝えるものであつた。ブリッゲン地区は商人街であるため、木簡の過半を占めるのは商取引の記録である。ブリッゲン商人の間ではルーン文字が生きていたということである。ノルウェー人物史2〔60~61頁〕のホーコン四世が王都と定めたベルゲンには、このような興味深い空間が存在していたのである。

しかしブリッゲン木簡群の中には、私が愛しき人よ、口づけを！  
私を愛してください。グンヒルドよ、私はあなたの妻を愛している。私はあなたを知っているのは私です。  
炎ですら私にとつては冷たいくらいに、私が、彼女の愛しき人なのだ。  
私がスタヴァンゲルにいたとき、私を愛していたのはインギビヨルクだつた。  
スタヴァンゲルはベルゲンとオスロの海路の間に位置する商都である。物資を調達して売りさばく商人たちは、一箇所にとどまる、ことなく船で往来した。この木簡の書き手にとって、インギビヨルクとは本妻とは別の、スタヴァンゲルでのかりそめの愛人だったのだろうか。

スミズはスネルドウベインのヴィグデイスと想いを述べた。

なんとも直接的な表現である。ブリッゲンのような狭い対面社会の中、出身

古都ベルゲンで大量に発見された、中世の木簡。そこに刻まれていたのはヴァイキングのルーン文字であり、なかには愛の告白もあった。

ノルウェー  
人物史

3

# 木簡の愛 ベルゲンの商人たち 12~15世紀

(文) 小澤実

地と名前がわかれれば、その人物を特定することはさほど困難なことではない。スマズ（固有名詞なのが鍛冶屋をあらわす一般名詞なのかわからない）自身が書いたものだろうか、それとも一人の関係を公にすることで何らかの利益を得る人物がいたのだろうか。

中世ルーン研究の第一人者テリエ・スパークランドは、このブリッゲンのような空間を、ラテン・アルファベットとルーン・アルファベットが織りなす「二重文字社会」と呼んでいる。ラテン語と俗語を併用する二重言語社会はいくらでもあるが、二つの文字が併用される社会は珍しい。木簡はブリッゲンだけでなく、オスロ、テヌスベリ、トロンハイムといったその他の商業地でも発見されている。ノルウェーで取引する商人とルーン・アルファベットは切っても切れない関係にあつたのかかもしれない。

中世において、ルーン文字は一世紀から六世紀のゲルマン時代にしばしば見られたような、神々の言葉としてお守りに刻むといった呪術的側面はほとんど失われ、単なる情報伝達の道具として機能していた。とはいっても、政治や信仰の世界で通用する普遍性はないため、哲学や法学のような抽象性の高い内容を扱うことはなかった。中世ノルウェーでルーン

文字が用いられたのは、商業用の木簡のほかには、墓碑銘であるとか、洗礼盤への署名であるとか、教会の壁への落書きであるとかといった、日常生活に関わるものばかりである。ラテン・アルファベットとルーン・アルファベットがどのような場面で使い分けられていたのか、まだわからないことが多い。私たちは今後の研究成果を待つしかない。

ただ言えるのは、中世のスカンディナヴィア世界にとって——もちろん地域差はあるが——、ルーン文字は自身と他のヨーロッパ世界を分かつアイデンティティ

のあらわれであった、ということである。十六世紀になると、デンマークやスウェーデンの学者たちが、自らの起源としてのルーン文字の研究に手をつけた。スウェーデンのゴットランド島や鉱山で著名なダーラナ地方では、近世や近代に入つてもルーン文字が使われていたことがわかっている。スカンディナヴィアを知りたければ、私たちもう少しルーン文字の世界に深く沈みこんでみる必要があるだろう。

